

ISSN 2186 – 3989

越中立山と善光寺信仰
— 『三国名勝図絵』の記事の分析から —

福江 充

Etchu's Tateyama and the Zenkoji Cult: An Analysis of Entry
in Sangoku meisho zue

Mitsuru Fukue

北 陸 大 学 紀 要
第48号(2020年3月)抜刷

越中立山と善光寺信仰 —『三国名勝図絵』の記事の分析から—

福江 充*

Etchu's Tateyama and the Zenkoji Cult: An Analysis of Entry
in Sangoku meisho zue

Mitsuru Fukue*

Received November 2, 2019

Abstract

This paper reports on the recent discovery of an entry on the temple Shin-Zenkōji (in Ōsumi's Soo-gun Takarabe-gō) in the Edo-period compilation of Satsuma history and lore entitled *Sangoku meisho zue*. According to the entry, Shin-Zenkōji, located in Takarabe-gō Moto-mura (the present-day Kitamata Sakamoto-chiku, Takarabe-chō, Soo-shi, Kagoshima), was established as a Shingon temple by a resident of Etchū's Tateyama named Niho Sakyō at the behest of Minamoto Yoritomo. For the new temple's main icon, Niho Sakyō had a bronze copy cast of the gilded-bronze Buddha worshipped at Shinano's Zenkōji. Some generations after Niho Sakyō's time, however, both Shin-Zenkōji's land and that of the Niho family became public property, and the temple was abandoned. Because of this, the entry claims, the temple's sculpture of the Buddha Amida was transferred to the Shingon temple Busshō-in in Takarabe-gō Sakuragi-mura.

As early as the 1980s, Kubo Naofumi briefly wrote about the Zenkōji cult in Etchū in the Toyama kenshi (Tsūshi-hen II Chūsei). There was additional research by Kubo and Ushiyama Yoshiyuki in the 1990s, and by Suzuki Keiji in the 2000s, but a dearth of relevant historical materials has constrained more extensive studies of this theme. The Shin-Zenkōji mention is, therefore, extremely important for understanding the medieval Zenkōji cult in Etchū as well as the relationship between the Tateyama and Zenkōji cults. This paper introduces the newly discovered entry.

Key word : Sangoku meisho zue, Etchū's Tateyama, Zenkōji cults, Shin-Zenkōji,
Tateyama Beliefs

*北陸大学国際コミュニケーション学部 Faculty of International Communication, Hokuriku University

はじめに

筆者は最近、薩摩藩の江戸時代後期の地誌『三国名勝図絵』のなかに、大隅国曾於郡財部郷の新善光寺に関する記載を発見した。それによると、かつて財部郷元村（現在の鹿児島県曾於市財部町北俣坂元地区）に存立していたと伝えられる新善光寺は、越中国立山の住人・新穂左京と称する人物が、源頼朝の命を受けて創建した真言宗の寺院だという。その本尊は左京が信濃国善光寺の金銅仏を模して新たに鑄造させたものであった。しかし、新穂左京の何代かのちに、新善光寺の寺領及び新穂氏の所領は全て官地となり、同寺は廃寺となった。そのため本尊の阿弥陀如来像は財部郷桜木村の真言宗仏性院に移遷されたという。

ところで、越中の善光寺信仰については、早くは 1980 年代に『富山県史（通史編Ⅱ中世）』のなかに、久保尚文氏による若干の言及が見られる。その後、1990 年代に入ると久保氏と牛山佳幸氏、そして 2000 年代に入ると鈴木景二氏の論文が見られるものの、関係史料が僅かなため、それほど多くはない¹。このような状況のもと、前述の新善光寺の記載は、越中における中世の善光寺信仰、及び立山信仰と善光寺信仰との関係などを考察するうえできわめて重要と思われる。そこで本稿においてこの史料を紹介したい。

1. 『三国名勝図絵』の概要

本稿で取り上げる『三国名勝図絵』は、薩摩藩第 10 代藩主島津斉興が、五代秀堯（五代友厚の父、御記録奉行などを歴任）や橋口兼柄（御記録奉行や町奉行などを歴任）、橋口兼古らに、薩摩国、大隅国、及び日向国の一部を含む薩摩藩領内の地誌編纂を命じ、天保 14 年（1843）にまとめられた全 60 巻の文書である。それをもとに明治 38 年（1905）に和綴じ本全 20 巻として出版された。

その後、昭和 41 年（1966）にも南日本出版文化協会から全 3 巻（B5 版）として出版された。さらに昭和 57 年（1982）には、明治 38 年（1905）の和装版を底本とした復刻版が、洋装本全 4 巻（B5 版）として出版された。この版には原口虎雄（原口泉の父）による「索引編」が別巻として添えられている。

さて、この文書の第 12 巻・巻之 35・大隅国曾於郡財部郷「阿弥陀堂」の記事は、越中国立山の住人、新穂左京と称する人物の大隅国曾於郡財部郷での新善光寺の創建について記しているが、前述のとおり、この内容は鎌倉時代の善光寺信仰や立山信仰に関わるものと思われる。

そこで、以下この史料を紹介するとともに、若干の考察を試みたい。なおその際、明治 38 年（1905）に出版されたものは国立国会図書館デジタルコレクションにおいて公開されており、これを用いて当該史料を見ていきたい。

2. 該当部分の抜粋と翻刻

国立国会図書館デジタルコレクションの『三国名勝図絵』12 巻については、次のとおりである。『三国名勝図会』：全 60 巻・12（巻之 34-36）、著者：五代秀堯・橋口兼柄共編、出版者：山本盛秀、請求記号：291・97-G56S、出版年：明治 38 年（1905）、原本の寸法：縦 27.0cm × 横 19.0cm。

(巻の 35)

阿弥陀堂 地頭館より亥の方、五十間余、

坂元村にあり、本尊立金像にして、左右に又金立像二体あり、此阿弥陀仏は、古来当邑の真言宗新善光寺へ安置せしに、其寺何の比に敷廃して、今は仏性院の所管なり、仏性院第十四世、憲海法印の別記を按ずるに、此阿弥陀如来は、得仏公薩隅日三州の封を受け、始下向し玉ふ時、鎌倉右大将源公の命にて、信濃国善光寺の影像を模し鑄させ、御本尊として、越中国立山の住人、新穂左京といひし者、守り下りて、此所に安置し、寺を営み新善光寺と名づけ、土田千町（当新の内に、三百五十町、横川に三百五十町、真幸院簡野に三百町といふ）を寺領となし、十二の坊舎を建らる、新穂氏には、領地、及び宅地を賜ふて、堂の辺に住て、寺を守衛し、右大将公の御感状七通、当寺発起の書二卷、家系三卷を筒藏せしに、火災に罹りて焼亡す、其裔孫利盛利久の時代に、領地大判官に収入せられ、纔三丁六畦となりしに、又雅楽介某の時、寺領及び新穂の所領も都て官地となる、是何れの歳なるや詳ならず、爾後対に衰頹し、新穂の後胤は、都城邑主の家臣となり、其邑の安永に住居し、此堂は、祖先の由緒を伝えて、毎歳祭日に詣て拝するのみと見江たり、此事は、旧記の正しき者には見ることなし、然れども今暫く記して、他日の考に備ふ

(巻の 35)

小牧山法嚴寺仏性院 地頭館より亥子の方、七町半、

桜木村にあり、本府大乘院の末にして、真言宗なり、本尊不動明王、中興開山舜海法印、応永比の人なり、元禄七年、火災ありて、蔵書悉く焼亡せり、故に開基の年月等詳かならず、当村の祈願所なり、往昔当寺に旅僧来り、住僧柿を与へ、小刀を出しければ、帰る時、こかたなたしかにをくといふことを沓冠にして、一首の和歌を詠して残せり、
こゝにきし かゝるゑにしか たびの身に
なさけかくるを たのみにぞゆく

其旅僧は、西行法師なりしといへり、按ずるに、春樹題林抄は、和歌の家の書なり、其中に此歌を載て、本藩の事にはあらず、いかゞにや、後人これを審にせよ、伊作の巻にも、西行の遺跡を載す。互考すべし、古へは当邑に、当寺の末、和田房善光寺、万願寺の三院ありしに、今其旧跡のみ伝れり、其万願寺は、応永十年建立の由緒、舜海が別記に見江たり

3. 史料の内容

(巻の 35「阿弥陀堂」の内容)

「阿弥陀堂」は元村（現在の鹿児島県曾於市財部町北俣坂元地区）にある。本尊は金銅製の阿弥陀如来立像で、左右に 2 体の立像が共に安置されている（本尊・阿弥陀如来、脇侍・観世音菩薩と勢至菩薩の阿弥陀三尊形式か）。それらは古来、真言宗の新善光寺に安置されていた。しかし、この新善光寺はいずれの頃から廃寺となり、今は仏性院の管理下にある。

仏性院第 14 世・憲海法印の記録書によると、この阿弥陀如来立像は、得仏公（惟宗忠久、後に島津忠久）が右近衛大将の源頼朝（建久元年〔1190〕→右近衛大将、建久 3 年〔1192〕→征夷大將軍）より、薩摩国・大隅国・日向国の 3 国の守護職を補任されて下向した際（建久 8 年〔1197〕）、頼朝の命令で、信濃国善光寺の金銅仏を模して鑄造させ、越中立山の住人・新穂左京と称する人物に護り運ばせてこの元村（坂元村）に着し、ここに寺を建ててこの金銅仏を安置し、新善光寺と名付けたという。

同寺は土田に 1000 町の寺領を与えられ、12 の坊舎が建てられたという。新穂氏は領地と宅地を与えられ、堂の辺りに居住して新善光寺を守衛した。同寺は右大将公（源頼朝）の感状 7

通、同寺の発起の書類 2 巻、家系の書類 3 巻を筆筒に入れて所蔵していたが、火災に遭って焼亡した。

新穂氏の後裔である利盛・利久の時代に新善光寺の領地の大半が官に没収され、わずかに 3 丁 6 畦を残すのみとなった。また、後裔の雅楽介某のとき、いずれの年かは詳らかではないが、残りの新善光寺の寺領及び新穂氏の所領も全て官地となった。

新善光寺はそののち遂に衰頹したため、新穂氏の後裔は都城郷（鹿児島藩都城島津氏領）の領主（北郷氏〔鹿児島藩都城島津氏〕）の家臣となり、その村の安永（都城郷に属す）に居住した。この坂元の阿弥陀堂については、今は人々が新善光寺や新穂氏にまつわる祖先の由緒を伝えて、毎年祭日に参拝するだけとなっているように見える。以上の内容は、正確な事実を伝える旧記などには見られないが、一応、今ここで記しておいて、他日、誰かが調べる際に参考となるようにしておく。

（巻の 35「小牧山法嚴寺仏性院」の内容）

「仏性院」は真言宗の寺院で、桜木村（現在の鹿児島県曾於市財部町北俣桜木地区）に所在した。開山は舜海法印で、応永年間（1394～1428）の頃の人物である。元禄 7 年（1694）に火災に遭い蔵書はことごとく焼失したため、開基の歳月は不明である。この寺は桜木村の祈願所である。

昔、寺に旅の僧がやって来た時、寺僧が柿を与え、それを剥くための小刀を差出したところ、「こがたな」を頭韻として歌を詠んで返したが、その僧こそ西行法師その人であったという伝承がある。

かつてこの村には、仏性院の末寺として和田房、善光寺、万願寺の 3 寺院が存在したが、今はその旧跡だけが伝えられている。このうち万願寺については、舜海の別記に応永 10 年（1403）の建立の由緒が記されている。

4. 鹿児島県曾於市財部町北俣坂元地区の阿弥陀堂

『三国名勝図絵』に記載される大隅国曾於郡財部郷の阿弥陀堂は、鹿児島県曾於市財部町北俣坂元地区の阿弥陀堂跡に建っていたと伝えられている。

昭和 11 年（1936）『鹿児島県財部町郷土史』²によると、坂元の阿弥陀堂跡は、かつて新善光寺の阿弥陀堂が建っていた場所であることが記されており、さらに、新善光寺が廃寺になったのちの経過は詳らかでないが、昭和 11 年（1936）当時、同寺の本尊と思われる尊体が、同地区の高野松五郎氏の屋敷内において、小さな厨子に納めて祀られていたという。当時は毎年 7 月 15 日に祭礼も行われていた。

『角川日本地名大辞典 46 鹿児島』³には、近世の北俣村に関する内容として、村内の坂元地区に新善光寺の阿弥陀堂が存在したことや、また、承応 4 年（1655）6 月 17 日付「財部中仏閣改帳」をもとに、新善光寺が島津氏初代忠久の三州下向にあたり、随行した新穂左京によって信濃国善光寺より阿弥陀如来が勧請され、建立されたことなどが記されている。

さて、『鹿児島県財部町郷土史』に記された坂元の高野松五郎氏屋敷の旧阿弥陀堂の尊体は、木造阿弥陀如来立像であり、現在、コンクリート製の龕のなかに比較的新しい木製の厨子をもたまって安置されている（写真 1・写真 2）。

ところで、『三国名勝図絵』の「阿弥陀堂」の記載に見られるように、新穂左京が勧請した本尊の阿弥陀如来立像は銅造であり、脇侍として 2 体の立像（観音菩薩と勢至菩薩か）をもなっていた。いわゆる善光寺式阿弥陀三尊像（「一光三尊」とも称され、ひとつの大きな舟形光背の前に阿弥陀如来・観音菩薩・勢至菩薩の三体が並び立ったかたち）であったと考えられ

る。これらの尊体は新善光寺が廃寺となったあとに仏性院が管理したという。これに対して、坂元の高野松五郎氏屋敷の旧阿弥陀堂での安置を経て、現在はコンクリート製の祠に安置されている阿弥陀如来立像は単尊で木造であり、それはこれまで『三国名勝図絵』に記載されたかつての新善光寺の本尊と見なされてきてはいるが、実は全く異なるものである。

5. 史料の背景

5—1. 史料の登場人物

惟宗忠久（後の島津忠久）は平安時代末期から鎌倉時代前期にかけての武将で、元々は平安京で摂関家に仕えていた。忠久の母が源頼朝の乳母子だった縁で頼朝に重用され、頼朝が台頭し後の文治元年（1185）に鎌倉幕府を創始すると、幕府の御家人として活躍した。建久 8 年（1197）、忠久は頼朝から薩摩国・大隅国の守護に補任され、さらにその後間もなく日向国の守護にも補任されている。

さて、『三国名勝図絵』の「阿弥陀堂」の記事においては、忠久がこの補任を受けて九州地方に下向した際、同じく頼朝の命で越中国立山に住む新穂左京と称する人物が忠久に随行したとする。左京は頼朝から、まずは信濃国善光寺の善光寺如来の金銅仏を模して鑄造することと、次にその金銅仏を大隅国まで運び、現地で寺を建立して安置することを命じられていた。そこでたどり着いた地が曾於郡財部郷の坂元村であり、左京はこの地に新善光寺と称する寺院を建立したという。

この新穂左京と称する人物の素性については不明である。「新穂」の氏姓は、佐渡国加茂郡新穂庄が起源とされ、村上天皇の皇子具平親王の子師房にはじまる源氏（村上源氏）本間氏族と伝えられている⁴。前述のとおり『三国名勝図絵』の「阿弥陀堂」の記事によると、新穂氏の子孫は、最終的に都城郷（鹿児島藩都城島津氏領）の領主（北郷氏〔鹿児島藩都城島津氏〕）の家臣となり、その村の安永（都城郷に属す）に居住したとされている。そして奇しくも、現在、新穂の姓が各都道府県のなかで約 100 名を越えるのは鹿児島県（約 300 名）と宮崎県（約 200 名）だけで、特に宮崎県の場合は都城市（約 200 名）に一局集中している。また鹿児島県の場合は、鹿児島市（約 100 名）・出水市（約 70 名）・阿久根市（約 60 名）・曾於市（約 30 名）・鹿屋市（約 20 名）に分布している⁵。したがって、『三国名勝図絵』の「阿弥陀堂」の記事が、あながち無意味なものとも思えない。

さて、頼朝が信濃国善光寺の善光寺如来を模しての鑄造とそれを大隅国で安置するために新善光寺の建立を命じた背景としては、頼朝が善光寺如来への信仰が深く、源平騒乱の頃、火災にも遭って破損が著しい善光寺の復興に尽力していたといったことがあった。なお、その後の北条氏もまた善光寺信仰の熱心な信者であった。こうした鎌倉幕府と善光寺の関係については、牛山佳幸氏の『善光寺の歴史と信仰』⁶に詳述されており、同書を参照していただきたい。

5—2. 善光寺信仰と立山及び越中国との関係

『三国名勝図絵』に記載された大隅国曾於郡財部郷での新善光寺の創建話に、創健者の新穂左京がその実在の有無にかかわらず「越中国立山の住人」として登場することの意味を考えなければならない。そしてその際には、これまで善光寺信仰と立山、及び立山信仰との関係に言及してきた久保氏・牛山氏・鈴木氏・杉崎氏らの研究成果をある程度整理しておく必要がある。

東大寺の再建に尽力した平安時代末期の浄土宗の僧・重源（1121～1206）は自著『南無阿弥

陀仏作善集』⁷のなかで、信濃国の善光寺に二度参詣したことを記しているが、二度目の際には、白山と立山で禪定登山を行ったあとに善光寺を訪れている。この件については前掲3氏がともに述べている。ただし、このときの重源の立山・善光寺間の経路は史料的に不明であり、これに対し鈴木氏は、重源のような山岳修行に長けた行者であれば立山を下りて日本海に沿う北陸道は通らず、山中を移動してザラ峠越え、針ノ木峠越えで信濃国の大町に出て、善光寺に向かった可能性もあることを指摘している。この山の道は、のちの戦国時代には立山参詣者や商人も活用している。

さらに鈴木氏は、「立山伝記」の浄土山（立山連峰のなかの峰のひとつ）の記述に、信濃国長野の善光寺本尊の別称である「一光三尊」の用語が見られることや、中世の善光寺参詣路、浄土山の位置、善光寺本尊の性格などの総合的な考察の結果、中世には、立山が北国の霊場として白山、善光寺とひとつながりの修行の道を形成しており、そのなかで立山連峰の浄土山は善光寺本尊を遥拝する場であり、その来迎する聖地となっていたことを指摘している⁸。

近世初期の『奇異雑談集』所収「五条の足軽、京にて死するに越中にて人これにあふ事」⁹の説話から、中世においては、西国からの善光寺参詣者や修行者、旅人、商人たちが、越中の北陸道を通行していたことがわかる。

ところで、この説話には立山参詣のことが見られない。しかし、そのなかに立山姥堂や地獄の説明が含まれていることから、善光寺参詣者と立山との何らかの関わりが想定される。また、久保氏は、前述の重源の事例、及び観応元年（1350）の「社家記録（八坂神社記録 上 六月二十五条）」¹⁰から、善光寺参詣者が白山・立山に参詣したことを指摘するとともに¹¹、さらに『奇異雑談集』の説話は善光寺聖が唱導したものであり、善光寺信仰が立山信仰に混入していることを指摘している¹²。

立山山麓の曹洞宗立川寺に伝わる『立川寺年代記』には、宇多天皇在位中（887～896）から応仁元年（1467）までの記事が収められており、そのなかには善光寺に関するものも見られる。したがって、そのことから、善光寺参詣者いわゆる「善光寺聖」たちが、立川寺の所在する立山山麓を通過したであろうことが指摘されている¹³。

牛山氏は、「中世の北陸道が、西国からの善光寺参詣者の通る宗教道路でもあった」ことや、「善光寺・白山・立山の三か所をセットで巡ることが、「北国修行」と呼ばれていた」ことを指摘した¹⁴。いわば富士山・立山・白山の三か所をセットで巡る「三禪定」ならぬ善光寺・白山・立山の「三禪定」である。さらに、善光寺信仰と立山信仰にはその特質のひとつに女人救済があり、無数の女性参詣者が存在したと想定し、立山山麓芦峯寺の布橋灌頂会の儀礼に対してもそれが女人救済を目的としている点から、善光寺信仰との関わりを想定すべきであると説く。つまり、立山の布橋灌頂会は、もともと立山山麓を通過した女性の善光寺参詣者をターゲットにして始められたものと推測し、善光寺信仰が立山に与えた影響として、「布橋灌頂会は「中世北陸道における善光寺信仰」の展開過程の中でとらえるべき問題である」と指摘した¹⁵。

杉崎氏は、善光寺信仰が立山信仰における銅造の「矢疵の阿弥陀」像を中心に、「阿弥陀造像の展開にも作用した」と推測している。また、高岡市の称念寺の「立山大権現本地仏」と称する木造阿弥陀如来立像の部分に、善光寺如来像の作例が見られることや、さらに、明治の廃仏毀釈の影響で、立山から愛知県北名古屋市の林證寺と松林寺に移遷されたと推測される銅造阿弥陀三尊立像¹⁶に、信濃国長野の善光寺本尊の冠称である「三国伝来」の称がともなっていること、そしてその唱導に善光寺縁起の影響が見られることなども指摘している¹⁷。

さて、こうした善光寺信仰と立山との関わり以外にも、越中国には善光寺信仰の痕跡が見られる。

南砺市安居の真言宗寺院・弥勒山安居寺が所蔵する「安居寺文書」には、善光寺に関わる文書が2点見られる¹⁸。1点は、天文5年（1536）3月12日付の「越中国石黒荘最勝寺々領並末寺目録」である。この文書から、石黒荘弘瀬郷高宮村（現、南砺市高宮）に「善光寺」、いわ

ゆる新善光寺が存在していたことと（現在は廃寺、初見は『蔭涼軒日録』延徳元年〔1489〕11月24日条）¹⁹、当時は足利氏の祈願寺となっていた臨済宗の最勝寺（現在は廃寺で南砺市川西に最勝寺跡がある）の末寺になっていたことがわかる。もう1点は慶長16年（1611）8月1日付の「善光寺聖智教房譲渡状」で信濃善光寺に関わるものである。この文書から、智教が同年8月に安居寺に立ち寄ったことや、そこからさらに、善光寺聖の信濃・上方間の往復には北陸道を経由していたこと、途上の南砺地方は善光寺聖の活動が比較的盛んな地域であったことなどが示唆される。

射水市善光寺にも、承元元年（1203）以前に成立した放生津善光寺（禅興寺、承元元年〔1203〕以前に成立、典拠は『光明真言結縁過去帳』『西大寺諸国末寺寺』）²⁰が存在していたが、現在は廃寺である。

5—3. 越中国と大隅国の守護・北条（名越）朝時

牛山氏の調査によると、正式寺号を「新善光寺（あるいは善光寺、善光院）」と称する寺院は全国に約80か寺あり、その多くの成立年次は比較的新しく、近世以降あるいは近代になってから新善光寺と称するようになったものもあるという。一方、中世の史料上で確認される「（新）善光寺」は約70か寺あるという²¹。

さて、本稿で取り上げた『三国名勝図絵』のなかの大隅国曾於郡財部郷の新善光寺に関する記載については、執筆者である五代秀堯や橋口兼柄、橋口兼古らが天保14年（1843）の段階で、「此事は、旧記の正しき者には見ることなし、然れども今暫く記して、他日の考に備ふ」と述べるように、その記事内容の正否を裏づけるような文献史料は当時既になかったのだという。したがって、『三国名勝図絵』に書き残された新善光寺自体の実在も疑問視されるし、場合によっては源頼朝や惟宗忠久（後に島津忠久）などの鎌倉時代初期の人物が登場するこの寺歴が、実際はそれ以降、ある程度時間を経てから新たに創作された可能性もあろう。

それにしても、善光寺如来を携えて大隅国に下向した人物が、なぜ「越中国立山の住人」であったのだろうか。その寺歴が後世の創作であれば、大隅国と越中国を繋ぐ要素にはいったい何があるのだろうか。そこで両国の繋がりや共通点などを探し求めた場合、大隅国と越中国は北条（名越）朝時が守護として両国を兼ねて支配していたことがあげられる。以下、これについて越中国、大隅国の順に見ておきたい。

信濃国長野の善光寺は源平騒乱の頃に火災にも遭ったが、源頼朝は善光寺如来への信仰が深く、同寺の復興に尽力し、その後の北条氏もまた善光寺信仰の熱心な信者であった。北条氏と善光寺との関係は、三代執権泰時のときから、具体的には源頼朝以来の修造事業の継続と追善供養の開始という形で表れてくるという。このことは、北条氏が将軍家菩提寺としての善光寺の檀那を継承したことを意味している。修造事業を中心となって担当したのは北条泰時の弟の朝時（名越氏の祖）である。名越氏はこの事業を任されたことが機縁で、北条氏一門の中ではいち早く善光寺信仰を受容していた。そのことは別邸を構えた鎌倉名越の地に、仁治3年（1242）以前に、すでに新善光寺が建てられていたことからもうかがわれる²²。

北条朝時（1193～1245）は、鎌倉幕府第2代執権・北条義時の次男である。祖父・北条時政の屋敷であった名越邸を継承したことにより、名越朝時とも呼ばれる。兄は鎌倉幕府第3代執権・北条泰時である。

この朝時は越中国との関わりが深い。承久3年（1221）の承久の乱では北陸道の大將軍として、佐々木信実や結城朝広らと協力して転戦した。越後国の親不知（現新潟県糸魚川市）や越中国の砺波山（富山県小矢部市）に布陣した朝廷軍を撃破した。戦後は上皇方に荷担した藤原範茂の処刑を行っている。貞応2年（1223）10月の時点では、朝時は加賀・能登・越中・越後

など北陸道諸国の守護を兼任した。守護の役所は放生津（現、射水市）に置かれ、放生津は国府に代わって次第に栄えた。朝時は嘉禄元年（1225）には越後守となっている。

前述のとおり、承久の乱の際に鎌倉方として北陸道に進軍したのは北条朝時であった。京方に与していた越中の石黒・宮崎党がこの朝時軍にやぶれると、越中の在地領主層はあっさりと鎌倉方に転じ、朝時に地頭職を寄進し、みずからは代官職をのぞみ、朝時の被官になろうとした。こうした例をひとつとして、越中の守護支配は在庁官人層さえも朝時の子孫守護名越氏の地頭代化・家人化することによって進展した。

越中が名越氏の守護国となるとともに、国衙支配機構そのものが名越氏に掌握されていった。名越氏は幕末まで越中・越後など北陸諸国守護職の座にあったが、同時に幕府政務の重職も担い続けた。そのため守護の名越氏、及び守護代の肥後氏は鎌倉を離れられず、越中現地の国支配は又守護代として井上氏にゆだねられていた²³。

ところで前節において、かつての放生津に含まれる射水市善光寺には、承元元年（1203）以前に成立した放生津善光寺（禅興寺）が存在していたことを述べたが、この寺院についてはまさに、越中守護名越氏の善光寺信仰との関連が推測され興味深い。

次は大隅国について見ていくと、大隅国守護・島津荘大隅方惣地頭職も北条氏が継承していった。すなわち、北条時政・義時、それ以降は泰時の弟朝時にはじまる名越氏に継承されていった。守護名越氏は、前述のとおり複数国の守護職を兼任していたので、越中国の場合と同様、大隅国には下向してはいなかった。名越氏は、同じく越中国の場合と同様に肥後氏を守護代に任命した。しかしその肥後氏も鎌倉にいたので、大隅国現地で守護所を束ね政務をとったのは守護又代官であった²⁴。

6. 大隅国大隅郡垂水郷に伝わる平家の落人伝説と越中立山

大隅国曾於郡財部郷のすぐ近くの同国大隅郡垂水郷（現、鹿児島県垂水市）には、善光寺信仰やそれを外護した源氏との関係ではないが、越中国立山に関わる平家の落人伝説が伝えられている²⁵。

さて大隅国においては、曾於郡財部郷の新善光寺の創健者が「越中国立山の住人」とされていたり、大隅郡垂水郷の平家の落人伝説で、落人が越中国立山のひととされていることなど、なぜか立山との関係が強調されておりとても興味深い。現在のところ、その背景については不明であり、今後の課題であるが、以下参考のためにその内容を整理しておきたい。

垂水市内で平家の落人部落と伝えられているのは、段、ツンのこま（鶴の小間、鶴の河間、平家の一族の間では柏木と称していた）、野久妻（のぐつま）、市木、新御堂、駿河原、大久保（おつぼ）、浦之谷などである。

伝説によると、垂水郷にたどり着いた平家の落人一族は当初、市木や野久妻などに隠れ住んでいたという。そのうち、一部の者たちは段を経て柏木（鶴の小間）に移住した。しかしやがて一族みんなで段まで引き返し、一部の者はそのまま段に留まり、また一部の者は浦之谷に移住したという。

このなかで柏木（鶴の小間）は、昭和 42 年（1967）に高隈ダムとそれにとまう人造湖の大隅湖が完成したために水没したが、そこにはかつて、平家の一族立山氏創建した立山権現が存在したという。

垂水郷にたどり着いた平家の落人の立山氏・坪内氏・川井田氏の 3 氏うち、立山氏の一族は大久保にも居住した。大久保の名称は、越中国に大久保の庄があり、その地名をとったともいう。

おわりに

以下、本稿の内容を整理しておきたい。

大隅国曾於郡財部郷元村（現在の鹿児島県曾於市財部町北俣坂元地区にあたる）の阿弥陀堂には、本尊として金銅製の阿弥陀三尊像が安置されている。それらはかつて元村に存立していた新善光寺の本尊であったが、同寺が廃寺となり、そののち財部郷桜木村（現在の鹿児島県曾於市財部町北俣桜木地区にあたる）の仏性院の管理下に置かれた。

そしてこの阿弥陀三尊像には由緒があり、惟宗忠久（のちに島津忠久）が、源頼朝より薩摩国・大隅国・日向国の3国の守護職を補任されて下向した際、頼朝の命令で、越中立山の住人・新徳左京に信濃国善光寺の金銅仏を模して鑄造させ、忠久に随行して、九州に持って行かせたものだという。左京は財部郷元村にたどり着き、そこに真言宗の寺院を建ててこの阿弥陀三尊像を安置し、新善光寺と名付けたという。なお、新善光寺はのちに廃寺となり、新徳氏の子孫は鹿児島藩都城郷の領主（北郷氏〔鹿児島藩都城島津氏〕）の家臣となり、その村の安永村（都城郷に属す）に居住したという。

さて、上記の『三国名勝図絵』における大隅国曾於郡財部郷の阿弥陀堂及び新善光寺に関する記載については、同書の執筆者である五代秀堯や橋口兼柄、橋口兼古らが天保14年（1843）の作成段階で、その記事内容の正否を裏づけるような文献史料は当時既に散逸しており、掲載するか否かを迷っている。しかし最終的には「然れども今暫く記して、他日の考に備ふ」と賢明な判断をくだした。これについて、「火のないところに煙は立たない」との諺があるように、新徳の姓が各都道府県のなかで約100名を越えるのは鹿児島県（約300名）と宮崎県（約200名）だけであり、特に宮崎県の場合は、新徳氏が移住したという都城市（約200名）に一局集中しているといった事実は、財部郷元村の阿弥陀堂及び新善光寺に関する記載の真偽を考えるうえできわめて重要である。

新徳左京の実在や本当に越中国立山の住人であったか否かについては、現在のところ史料的に明らかにすることはできない。しかし、ここで重要なことは、「越中国立山の住人」が「信濃国長野の善光寺」と直接的な関係を持って活動している点と、そしてそれが源頼朝の命令によるものとされている点である。これにはその背景として、もちろん源頼朝及び鎌倉幕府の善光寺如来へのきわめて深い信仰があったのだろうが、それに加え、第5章2節で指摘した中世における善光寺信仰と立山及び立山信仰との密接な関係があった。また、特に牛山氏の「善光寺・白山・立山の三か所をセットで巡ることが、「北国修行」と呼ばれていた」との指摘は氏の慧眼であり、いわば富士山・立山・白山の三か所をセットで巡る「三禅定」のように、善光寺・立山・白山の三霊場が、修行者たちにはひとつのグループとして見られていたことは間違いない。さらに、善光寺信仰と立山信仰にはその特質のひとつに女人救済があり、したがって牛山氏が既に指摘するとおり、今後は善光寺信仰と立山信仰を比較しながら研究を進めていく必要がある。

ところで、『三国名勝図絵』における大隅国曾於郡財部郷の阿弥陀堂及び新善光寺に関する記載が後世の創作であるとすれば、大隅国と越中国を繋ぐ要素にはいったい何があるのを考える必要がある。そこで筆者は、大隅国と越中国では北条（名越）朝時が守護として両国を兼ねて支配していたことを指摘したが、直接的な影響関係については調査が進んでおらず、今後の検討課題としたい。

写真1：鹿児島県曾於市財部町北俣坂元地区の阿弥陀堂（写真は加塩英樹氏の提供）



写真2：鹿児島県曾於市財部町北俣坂元地区の阿弥陀堂に安置される木造阿弥陀如来立像（写真は加塩英樹氏の提供）



参考文献

- ¹ 主な文献に以下のものがある。『富山県史 通史編Ⅱ 中世』（225頁～230頁、258頁～261頁、669頁～674頁、富山県、1984年）、久保尚文『越中における中世信仰史の展開（増補）』（10頁～14頁、桂書房、1991年）。牛山佳幸「寺院史の回顧と展望—中世の尼と尼寺に寄せて—」『日本の仏教 第1号』（159頁～171頁、日本仏教研究会編、法蔵館、1994年）、同「北陸地方善光寺関係調査報告—安居寺文書の紹介—」『市誌研究ながの 第2号』（21頁～28頁、1995年）、同「善光寺信仰と中世の越中」『地方史研究 第269号』（5頁～10頁、地方史研究協議会、1997年）、同『善光寺の歴史と信仰』（95頁、187頁、188頁、法蔵館、2016年）。鈴木景二「立山浄土山と信濃善光寺」『富山史壇 第145号』（59頁～67頁、越中史壇会、2004年）、同「ザラ峠・針の木峠越えの道と善光寺信仰（例会報告要旨）」『交通史研究 第6号』（10頁～14頁、交通史研究協議会、2004年）。

- 4巻』（89頁・90頁、交通史研究会、2007年）、同「金沢商人の上越親鸞旧跡・信濃善光寺参詣」『飯綱町の歴史と文化（いづな歴史ふれあい館紀要 第3号）』（18頁～38頁、いづな歴史ふれあい館、2015年）、杉崎貴英「「験仏」をめぐる祈り／語り／かたち―越中・立山そして「矢疵の阿弥陀」への道のり―」『験佛化現―立山権現と越中の生身仏信仰―』（38頁～47頁、富山県〔立山博物館〕、2018年）。
- ² 『鹿兒島県財部町郷土史 第7編 民俗』（992頁、財部町教育委員会、1936年）。
- ³ 『角川日本地名大辞典46鹿兒島』（237頁、「角川日本地名大辞典」編纂委員会、角川書店、1983年）。
- ⁴ 「名字由来net」（<https://myoji-yurai.net/searchResult.htm?myojiKanji=%E6%96%B0%E7%A9%82>）（2019年10月1日閲覧）。
- ⁵ 「日本姓氏語源辞典」（<https://name-power.net/fn/%E6%96%B0%E7%A9%82.html>）（2019年10月1日閲覧）。
- ⁶ 牛山佳幸『善光寺の歴史と信仰』（93頁～135頁、法蔵館、2016年）。
- ⁷ 『富山県史 史料編Ⅱ 中世』（198頁・199頁、富山県、1975年）。
- ⁸ 鈴木景二「立山浄土山と信濃善光寺」『富山史壇 第145号』（59頁～67頁）。
- ⁹ 『奇異雑談集』巻第1「五条の足軽、京にて死するに越中にて人これにあふ事」（『仮名草子集成』第21巻、75、東京堂、1998年）。
- ¹⁰ 「社家記録（八坂神社記録 上 六月二十五条）」『富山県史 史料編Ⅱ 中世』（280頁）。
- ¹¹ 久保尚文『越中における中世信仰史の展開（増補）』（11頁）。
- ¹² 久保尚文『越中における中世信仰史の展開（増補）』（11頁～14頁）。
- ¹³ 『富山県史 通史編Ⅱ 中世』（669頁～674頁）。
- ¹⁴ 牛山佳幸「善光寺信仰と中世の越中」『地方史研究 第269号』（7頁）。
- ¹⁵ 牛山佳幸「善光寺信仰と中世の越中」『地方史研究 第269号』（8頁～10頁）。
- ¹⁶ 杉崎貴英「「験仏」をめぐる祈り／語り／かたち―越中・立山そして「矢疵の阿弥陀」への道のり―」『験佛化現―立山権現と越中の生身仏信仰―』（38頁～47頁）。
- ¹⁷ 「三国伝来金銅像」と称され、「立山浄土山本尊三尊来迎仏」の別称も伝えられている。
- ¹⁸ 牛山佳幸「北陸地方善光寺関係調査報告―安居寺文書の紹介―」『市誌研究ながの 第2号』（21頁～28頁）。
- ¹⁹ 牛山佳幸「北陸地方善光寺関係調査報告―安居寺文書の紹介―」『市誌研究ながの 第2号』（21頁～28頁）。
- ²⁰ 牛山佳幸「善光寺信仰と中世の越中」『地方史研究 第269号』（6頁）。
- ²¹ 牛山佳幸『善光寺の歴史と信仰』（124頁）。
- ²² 牛山佳幸『善光寺の歴史と信仰』（100頁～104頁）。
- ²³ 『富山県史 通史編Ⅱ 中世』（32頁～53頁）。『富山県の歴史』（89頁～94頁、山川出版社、1997年）。富山県公文書館編『とやまの歴史』（42頁～45頁、富山県、1998年）。
- ²⁴ 『鹿兒島県の歴史』（118頁～122頁、山川出版社、1999年）。
- ²⁵ 永井彦熊『落日後の平家』（392頁～396頁、雄山閣、1965年）。『垂水市史 上巻』（70頁・71頁、垂水市史編集委員会、垂水市、1974年）。